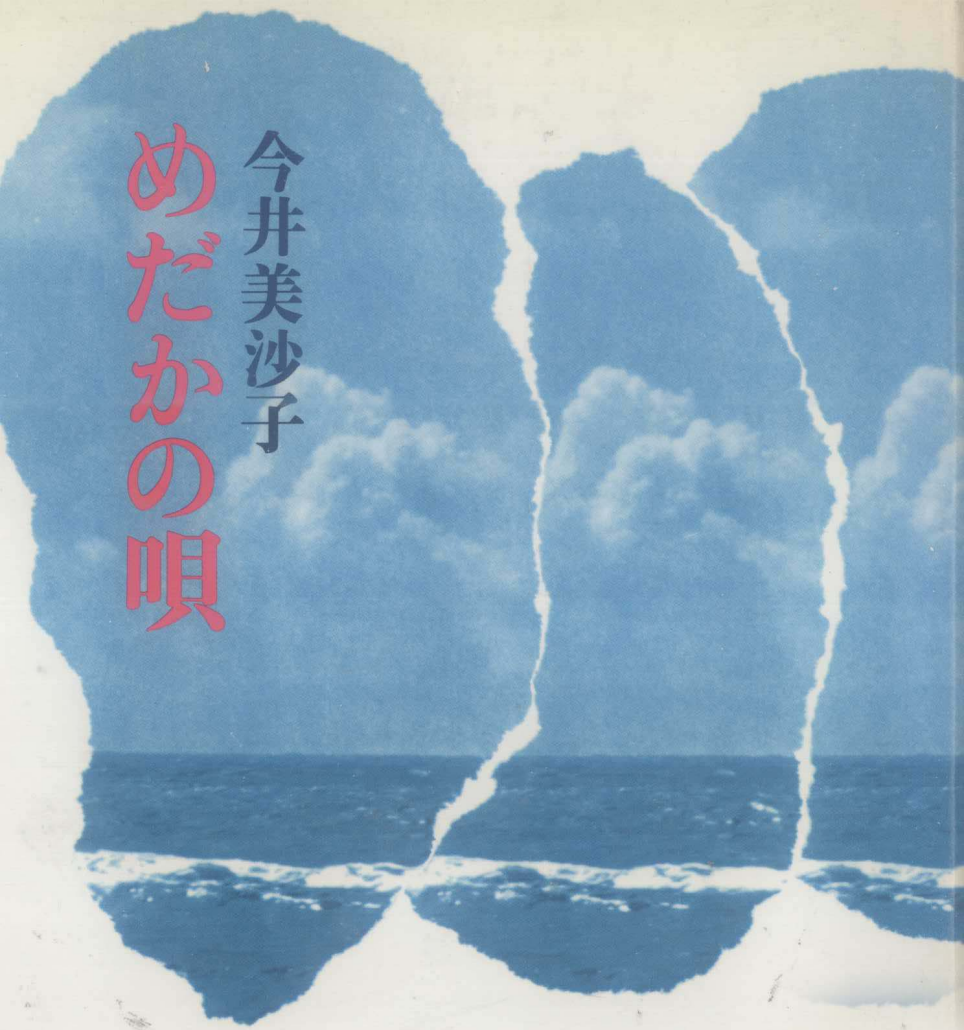
めだかの唄

今井美沙子



だかの唄

井美沙子

筑摩書房

今井美沙子（いまい・みさこ）
1946年長崎県五島に生まれる。五島高校を卒業後，上阪して今日に至る。会社勤めの後，結婚し一児の母となる。夫と児童画のアトリエを主宰するかたわら，雑誌等に主婦論・子供論を発表。
著書「めだかの列島」（筑摩書房，1977年）「遙かなる約束」（サンケイ出版，1979年）「子供が生きている現場」（ナツメ社，1979年）「阿波椿の唄」（ナツメ社，1980年）

めだかの唄

一九八一年一月一五日　初版第一刷発行

著者　今井美沙子
発行者　布川角左衛門
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話二九一―七六五一（営業）
二九四―六七一一（編集）
振替東京六―四一二三
印刷・厚徳社　製本・矢嶋製本

©一九八一　今井美沙子

Printed in Japan 0095-81131-4604

目次

1　私の故郷・五島

長崎県五島の四季　7
ごった煮家族　26
故郷の母　30
エネルギーかあちゃん　33
親孝行について　38
むね上げのモチまき　40
お菓子と私　42
私の先祖探し　44

ホッとする光景 47
約束に生きた老人 49
太陽は燃えちょるんじゃろか？ 54
矛盾だらけの女 56

2 故郷から遠く

自分のために生きる 63
四大紙をはべらす幸せ 72
私たちの〝ふだん着生活〟 82
後姿を見せる 89
五島生まれの〝根性〟 93
なぜ書くのか？ 99

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一本の木 103
おいでピカちゃん！ 109
子どもを武器にするとき 125
うんこのはなし 129
天国って忙しいとこやな 136
親切はにらの葉で包め 143
お魚のベッド 157
みんなと同じに 159
ひこ君と百点 162
わたしの子ども探訪記 164

心の旅ができたら　175

3　魂の故郷

精神の故郷へ帰りたい　189
待っている教会　192
クリスマスの小さい箱　197
常世の島のヤソパッチ　200
一枚の写真から　207
最期のとき　217
あとがき　219

装幀　今井祝雄

1

私の故郷・五島

長崎県五島の四季

〈春〉

五島の空は、春先には、かすみが膜を張って、透きとおった薄紫色に見える。のどやかな山の匂いと、さわやかな海の匂いが混じ合わされて、どちらが勝つということはない。山の匂いと海の匂いがせめぎ合いながら、ほどよい匂いを漂わせて、春が始まる。薄紫の空のすぐ下を、綿菓子のような柔らかい雲が、ゆっくりゆっくり流れていく。田んぼにたんぽぽやれんげ草が咲き乱れると、待ちに待ったひな祭りがやってくる。

今からもう二十七年も前のひな祭りの日の出来事を、私は季節がめぐってくるたび、懐かしく、暖かく思い出す。春になると、私はこの日のことを、どうしても誰かに喋りたくなる。

その年は、父がジュースの卸し売りの仕事に失敗して、家の経済状態は火の車であった。小学生の姉二人はひな祭りの祝いは諦めていた。けれども五歳の私には家の状態を理解できるはずもなかった。

朝から、新栄町の子どもたちが、

「美沙ちゃん、さっこちゃんの家に、おひなさまば飾っちょるけん、見に行こうばい」

と誘いに来てくれたので、私は普段の木綿の着物のまま、おひなさまを見に行った。

そこで、お昼は、去年のように、ごちそうは宗念寺のれんげ畑で食べようと、誰からともなくいいだして、そう決まった。

家に帰って、母にそのことを話すと、母の顔が曇った。

「美沙子、去年までは祝うてやれたけども、今年は無理たいね」

めったに子どもの前で泣きごとをいわない母が、しんみりと、すまなそうにいった。

「じゃけど、かあちゃん、おりゃあ、田んぼへ行きたかあ、みんな行くとじゃけん。早う引き出しのついちょる重箱にごちそうば詰めてくれろ」

母の気持ちも知らず、私は大声で泣きじゃくりながら訴えた。

母は心底、困惑しきった表情で、またできるようになったら、してあげるけん、今年は無理ばいわんと辛抱ばしてくれと、私を説得したが、幼い私は無情にも聞き入れる耳を持たなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「かあちゃん、ごちそうばつめてくれろ」
と泣き叫んだ。
「美沙子、新栄町の子どんは、みんな商売が繁盛しちょる家の子どんじゃけん、たらふくごちそうば作れるけども、うちはなあ、今年は無理たいね。それがわからんとか」
「わからん、わからん、なあーんもわからん、ごちそうばつめてくれろ」
そのとき、私は母の涙を初めて見た。

ガラガラと玄関のガラス戸があいた。
「美沙ちゃん、田んぼに行こうばい」
と口ぐちにいいながら迎えに来た。
しぶしぶ玄関に出て、
「まあだごちそうができちょらんとよ」
弁解すると、
「待っちょるけん」
というやいなや、玄関脇の三畳の板の間にドヤドヤと上がりこんだ。
私は台所へ走った。母も走った。
台所にはイモがころがっていた。

「かあちゃん、イモの天ぷらでよかけんごちそうば詰めてくれろ」
とっさに思いついて私はいった。
「かあちゃん、重箱ん中全部、イモの天ぷらでよかけん……」
母の顔がほころんだ。
「待っちょれ、イモの天ぷならすぐにできるけん……」
母は大慌てで、七輪に炭をおこして、天ぷら鍋をかけると、イモの天ぷらを山盛り揚げてくれた。
それから母は、裏の桜の木から葉っぱをもいできて、天ぷらと葉っぱを組み合わせて、調和よく入れてくれた。
一種類のごちそうの入った重箱ができあがると、私は菊の模様のよそいきの銘仙の着物を着て、赤い帯をしめてもらった。
母は私をせきたてて鏡台の前に坐らせ桃色のリボンをつけてくれた。
立とうとすると、待っちょれと私を制し、ちびた口紅の容器の奥に小指をつっこんで紅をつけ、私の唇に薄く紅をさしてくれた。
「さあ、これでよか、よか」
母は鏡の中の私を見て満足気に微笑んだ。

私たちは表へ走り出た。私はうれしかった。
たとえイモの天ぷらだけの重箱であっても、みんなと田んぼへ行けるのがうれしかった。
田んぼへ着いて重箱をいさぎよくあけた。
黄色いイモの天ぷらばかりがあらわれた。
「ワァー、おいしそうじゃ……」
「美沙ちゃん、エビとかえてくれろ」
「かまぼことかえてくれろ」
イモの天ぷらに人気が集中した。
私は喜んで交換した。
帰りぎわには、私の重箱には、はちきれんばかりのごちそうが詰っていた。
私はひとりで食べようとは思わなかった。
イモの天ぷらさえねだらず、ふたりしてどこかへ遊びに行った姉たちに、持って帰って食べさせようと、小さな心で考えて、喜びではちきれそうだった。
持って帰ると、父も母も、兄も姉も弟もびっくりしていた。
その夜は久しぶりに色とりどりのごちそうが食卓を飾った。
「かあちゃんのイモの天ぷらがごちそうに化けた、魔法の天ぷらばい」
というと、母はうんうんとうなずいて目にいっぱい涙を溜めて微笑んだ。

〈夏〉

長かった梅雨が終わると、雨で空にかかっていた薄紫色の膜が洗い流され、さっぱりとした、洗いたての顔のような空がのぞく。

山の匂いもいつしか消え、潮の匂いが島全体を包んで、五島の夏が始まる。

梅雨の間中、外へ出られなかった私たちは、梅雨があけて、のっぺらぼうな空がのぞくと、ワァーッと歓声をあげて外へ走り出た。

私たちの大好きな海が待っている。

広くて、底まで透き通って見える青い海が、早くおいでと私たちを呼んでいる。

だから、私たちはじっとしてはいられなかった。

直接降りてくる強烈な太陽の光を全身に浴びて、麦わら帽子をかぶった新栄町の子どもたちは、手に手にそうけ（竹のざる）を持って、口ぐちに笑いさざめきながら、海辺へ走った。

海辺へ着くとパンツ一枚になり、素足で焼けた砂浜を駆け回った。

波打ち際に棒切れで絵を描き、砂の家を造った。すると波が打ち寄せてきて、絵も砂の家も一瞬のうちに跡形もなくさらっていってしまう。

それがおもしろくて、何回も何十回もそれを繰り返した。

飽きると、岩に腰を降ろし、じっと海の彼方を眺めた。
水平線に小さくなった船が吸いこまれていく。何故、船が吸いこまれていくのか私たちは不思議で仕方なかった。
そして、あの海の向うに、私たちのまだ見たことのない町があるということも、とても信じられなかった。
五島以外、どこも知らない私たちは、おとなたちの話に出てくる東京や大阪があることなど、とてももう信じられなかった。
私は海辺から家に帰って来ると、きまって、父や母をつかまえてはきいた。
「とうちゃん、かあちゃん、あん大きか船はどこさん行きよると？」
「長崎さん行きよるとよ」
「長崎っち何ね？」
「海の向うにある町たいね」
「かあちゃんは長崎さん行ったことがあるとね」
「あるとよ。長崎ん町にはね、大きか建物があって、電車が走りよるとよ。夜にはネオンサインちいう、赤や青や黄色や緑の電気がチカチカと輝いて、そりゃあ、きれいかもんたいね。それから動物園もあるし……。あがどん（あんた）が長崎さん行ったら、珍しゅうて珍しゅうて、びっくりして目ばまわすとたい」

「とうちゃんは行ったことがあるとね？」
「あるとよ。長崎だけじゃなか、下関にも大阪にも神戸にも行ったとよ」
「じゃけど、おりゃあ、信じられん。見ちょらんけん、信じられん」
「信じられんでもほんとうじゃ！　美沙子、考えてみい、あがは天主さまば見たことがあるか、なかじゃろう。見たことはなかけども、天主さまはおるっち思うじゃろう？」
「うん、天主さまは絶対おる！　見えんけどおる！」
「それといっしょたい。じゃけど、長崎や大阪は船に乗ったら行けるとじゃけん、もっとたやすかことたいね」
父と母はそう説明してくれた。

毎日海辺へ行くと、新栄町の子どもたちと、あの海の向うに、ほんとうに私たちの知らない町があるのだろうかと真剣に話し合った。
ほとんどの子がないというなかで、元ちゃんだけがあるときっぱりといった。
みんなの視線が元ちゃんに集中した。元ちゃんは胸を張って説明した。
「おりゃあ、奈留島に行った。こん島ん向うたい。そん島はこん島よりもっと小さかった。小さかったけども、ちゃんと人間が住んどった。じゃけん、おりゃあ、まだ見ちょらんけども、長崎や大阪や東京っちいう町はあると思う……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com